ごあいさつ

福島県教育委員会教育長
富田孝志

県立図書館が現在の地へ移転してから早や二十周年を迎えました。県立図書館の運営につきまして、これまで県民の皆様からいただきました多くのご厚情とご支援に対しまして、改めて感謝申しあげます。

今、私達には情報を得るための様々な手段がもたらされております。しかしながら、例えば、過去にさかのぼり何か広く調べたいものが生じた時など、資料が整えられている図書館に並ぶものはないだろうと思います。

生涯学習へのニーズの高まりとともに高度となった学習要求、そのための資料や情報の提供、調査研究への援助、また迅速さなど、図書館への要請は益々大きくなっております。他方、読書の大切さが再認識され、読書活動推進への動きも広範なものとなってきています。本県でも去る三月、「福島県子ども読書活動推進計画」が策定され、県教育委員会では児童生徒の豊かな心を育むため、積極的に読書活動を推進しております。先日のある新聞に高校生の投書「……恩師は常々本の大切さを教えてくれたが、実際に自分が読むようになって初めてそのことに気付いた。本は人格を磨く。未来のために本を読もう。本を読む環境をみんなでつくろう。」が載っておりました。正に今、図書館に求められている大きな責務の一つであろうと思います。

今、移転後、はたちを迎えた県立図書館には、資料及び情報の計画的な収集や調査の相談などに力を尽くすこととともに、県内の図書館と連携し、読書活動を盛んにしていく、図書館の図書館としての力も求められております。ご尽力いただきますことを念願しごあいさついたします。

ごあいさつ

福島県県立図書館長
宮澤順一郎

昭和五十九年、福島市森合の地に新築移転した福島県立図書館も、二十世紀から二十一世紀へと世紀を越え、本年七月で二十周年を迎えました。

開館以来、県民の生涯にわたる多様な学習活動と調査研究に応えるため、資料及び情報の計画的な収集を図るとともに、「図書館の図書館」として市町村立図書館等への支援機能を強化し、効果的な県内図書館活動の展開に努めて参りました。

この間、平成十一年度からは「福島県立図書館情報ネットワークシステム」を稼働して、市町村立図書館等との連携、相互協力の促進を図り、情報化時代に即応した図書館サービスの充実に努めております。

また、平成十六年三月に策定された「福島県子ども読書活動推進計画」においては、県立図書館の担うべき推進方策が示されており、本年度からその実現への取り組みを始めたところであります。

二十一世紀を迎えた今日、情報通信技術の発達・普及は、図書館に対し、住民ニーズに即応する新たなサービスの展開とその充実を求めています。

これからの福島県立図書館が、時代に照らした高度な情報処理能力を備え、県民の多様な学習要求に的確に応えていくため、職員一同、一致協力して図書館運営に取り組んで参りますので、関係各位のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

想い出の地、森合西養山

元福島県立図書館長
鈴木寛治

「とき過ぎゆくに非ず、われら過ぎゆくなり」、旧知の遠藤女史から開館二十周年を迎えると聞いた時、何故か冒頭のことばが頭をよぎりました。

昭和五十九年四月、故辺見教育長から新館長への辞令をいただいた日のことが記憶に鮮明です。

当然のことながら全て、初めてのことでしたが、荘重かつ優美な新館が松平知事の文化施策のシンボルとして美術館と並び信夫の山麓に輝いているのを眼にした時は、感動を禁じ得ませんでした。それと同時に、この地がかつて学んだ福島経専（旧高商）の学舎の跡であったことに浅からぬ縁を感じたものでした。そんな感傷に浸っている間もなく、七月のオープンに向けての多忙な日々が続き、その甲斐あって順調に滑り出すことが出来たのが、職員一同の何より喜びであったと思います。県立館としての役割、他館との連携、司書の活躍できる環境等、それらの一つ一つが館の将来に深くかかわることに考え及ぶ毎日でもありました。そんな中、館長研修で筑波の情報大学の学生寮の汗くさい一室に、寝起きしながら過した暑い夏の数日が、懐しく想われます。

また現在（いま）は亡き原田美術館長さんと閉館後の一刻、種々歓談したことも忘れ難い一コマですが、あれから二十年、まさに感無量です。

懐旧談にのみ終始し失礼いたしました。

県立図書館のますますの充実、発展をお祈りいたします。

移転二十周年によせて

元岩瀬村図書館長
矢部甲明

先日、県立図書館より「移転二十周年によせて」の標題で、その思い出や感想についての、原稿依頼を受け、久し振りに県立図書館に会いたくて出かけて見ました。やはり、昔と同じく、信夫山を背景に建つ姿は同じだが、風格が備わって来たように思われたのは、歴史が刻まれたせいなのでしょうか、ともかく懐しく、暫し見蕩れてしまいました。

ああ、光陰は矢の如しと云うが、改めて二十年の歳月を思うと、感無量でした。建物は顔と云うが、更に磨きがかけられて、堂々たる姿に、ふと、己の齢と岩瀬村図書館の、奇しくも同じとは、今更のように思いを一層強くしました。

思へば、岩瀬村図書館発足当時、県立図書館よりの数々の指導・援助に、心強く運営に取り組んだことを、昨日、今日のように思い出されます。その後は、スタッフによる月毎の訪問と会話を、楽しみにしていた事を、今更のように懐かしく思い出されます。何と云っても、市町村の図書館が現在あるのは、県立図書館の方々による努力の賜と、深く感謝と敬意をはらっております。何と云っても、図書館の方々の意欲的な弛まぬ努力が、将来を明るく発展の芽を育んで来たのです。この「二十年」の地道な歩みが、現在を作り県下の中枢として、県民への奉仕を支え期待されているのです。今図書館の業務より去って十有余年の歳月を過ぎた今、現状に乏しく当を得た感想が描けず、過去の記憶を辿り、その一端を綴り筆を閉じます。

図書館は知の先生

郷土史研究家
新関利雄

図書館は、私にとっては知の土台石の様なものです。といっても他の図書館との付き合いはなく、県立図書館へ週に一度程度行きます。

最初は新着図書コーナーを見ます。私は調べるというより、日常の生き方の中で、新しいことに関心があります。また知る必要に迫られることのほうが多い生活だからです。

自治問題や、福祉、まちづくりなど、そして最新の科学や天文・イラク問題など、目に付いたものを借ります。しかしこのコーナーの本は、他の人も見る需要も多いと思うので、目次や内容をさっと見てなるべく早く返すのです。そして自分でも必要と思ったものを買うことにしています。

新着コーナーは、時代や社会の動きに司書の方々がよく反応して、選定・購入しているように私には見えます。自分一人の関心の範囲や知識などはしれたもので、「こんな本も出ていたのか」と知ることが多いのです。

また、図書館は知の宝庫ですから、私の予備的蔵書が公的に保存されている様なものだと勝手に思っています。

先日は蔵書にないものを他県の図書館から取り寄せてもらいましたが、単なる借用よりも、司書の方と話せばもっと知は広がるのが実感です。